

6.8.2 予測・評価

(1) 造成等の施工による一時的な影響及び施設の存在に伴う生態系への影響

1) 予測

① 予測内容

造成等の施工による一時的な影響及び施設の存在が対象事業実施区域及び周辺に成立する生態系へ及ぼす影響について予測した。予測内容を表 6.8.2-1に示す。

**表 6.8.2-1 造成等の施工による一時的な影響及び施設の存在
に伴う生態系への影響の予測内容**

予測項目	・地域を特徴づける生態系
予測対象時期	・動植物その他の自然環境の特性及び注目種等の特性を踏まえて注目種等に係る環境影響を的確に把握できる時期

② 予測項目

予測項目は地域を特徴づける生態系とし、予測対象とする注目種と影響要因との関係を表 6.8.2-2に示す。

表 6.8.2-2 生態系の予測項目

影響要因			予測項目
工事の実施 及び 施設の供用	施設の存在	生息地の消失又 は縮小	地域を特徴づける生態系 ・生態系の生息基盤の改変状況 ・生態系の注目種（上位性、典型性）
	造成等の施工によ る一時的な影響	土地の改変に伴 う水の濁り ^{注)}	

注) 工事の実施により下流の水路や池などに新施設整備予定区域からの工事排水が流入することが想定されるため、主に水路や池に生息する両生類や昆虫類、魚類及び底生動物を選定した。

③ 予測地域

予測地域及び予測地点は、調査地域のうち、動植物その他の自然環境の特性及び注目種等の特性を踏まえて注目種等に係る環境影響を受けるおそれがあると認められる地域として、「動物」と「植物」と同様とした。

④ 予測対象時期

予測の対象時期は、動植物その他の自然環境の特性及び注目種等の特性を踏まえて調査地域における注目種等に係る環境影響を的確に把握できる時期として、各要因の影響が最大になる時期を検討した。検討の結果を表 6.8.2-3に示す。

表 6.8.2-3 注目種の影響要因とその予測対象時期

影響要因			予測対象時期
工事の実施 及び 施設の供用	施設の存在	生息地の消失又 は縮小	土地の改変面積が最大となる時期
	造成等の施工による 一時的な影響	土地の改変に伴 う水の濁り	造成等の施工により土砂による水の濁 りに係る環境影響が最大となる時期

⑤ 予測の基本的な手法

i) 生態系の生息基盤の改変状況

環境類型区分ごとの生息基盤の改変状況についての予測方法は、分布、生息環境又は生育環境の改変の程度を踏まえた事例の引用又は解析による方法とした。

敷地の存在による生態系の生息基盤である植生の改変状況について、生態系の環境類型区分ごとにその面積と改変率を求めるとともに、生息基盤の改変による生態系への影響について定性的に予測した。

ii) 生態系の注目種（上位性、典型性、特殊性）

注目種の予測方法を表 6.8.2-4 に示す。

表 6.8.2-4 注目種の影響要因と予測方法

影響要因			予測方法
工事の実施及び施設の供用	施設の存在	生息地の消失又は縮小	<ul style="list-style-type: none">注目種の確認場所と工事施工計画を重ね合わせることにより、改変程度を予測する方法とした。改変の程度が重要な種に与える影響について、事例の引用又は解析により定性的に予測した。
	造成等の施工による一時的な影響	土地の改変に伴う水の濁り	<ul style="list-style-type: none">「6.5 水質」で環境保全措置として検討した「仮設沈砂池の設置」、「仮設沈砂池の浚渫」及び「速やかな転圧等」を実施したうえ、工事排水に伴う水質（水の濁り）の予測結果をもとに、工事排水の流入が想定される水路や池に分布する注目種の生息環境の変化の程度を予測する方法とした。変化の程度が重要な種に与える影響について、事例の引用又は解析により定性的に予測した。

⑥ 予測結果

i) 生態系の基盤環境の改変状況

土地の改変により対象事業実施区域内の基盤環境が改変され、動植物の生息・生育環境が減少する。各環境類型区分の改変の状況を表 6.8.2-5 及び図 6.8.2-1 に示す。

土地の改変により「丘陵地の樹林及び谷戸」が減少し（減少面積：5.2ha、減少率0.7%）、その減少分を「平地の耕作地及び市街地」が増加すると予測した。なお、「丘陵地の樹林及び谷戸」の減少面積の大半は、コナラ群落、竹林、アカメガシワ-カラスザンショウ群落、ネザサ-スキ群集であり、これらは二次的な植物群落であり、自然度は低い。

よって、土地の改変による生態系の基盤環境への影響は極めて小さいと予測した。

表 6.8.2-5 生態系環境類型区分ごとの改変状況

生態系 類型区分	群落名	現面積 (ha) [A]	改変面積 (ha) [B]	将来面積 (%) [B/A]	改変割合 (%) [B/A]
丘陵地の樹林 及び谷戸	シイ・カシ二次林	0.2	0.0	0.2	0.0
	コナラ群落	375.8	2.4	373.4	0.6
	アカメガシワーカラスザンショウ群落	36.1	0.8	35.3	2.1
	アカマツ群落	0.6	0.0	0.6	6.5
	ハンノキ群落	0.2	0.2	0.0	100.0
	ネザーススキ群集	7.7	0.7	7.0	9.7
	スギ・ヒノキ・サワラ植林	54.2	0.0	54.2	0.0
	竹林	163.7	1.0	162.7	0.6
	路傍・空地雑草群落	5.1	0.0	5.1	0.0
	果樹園	4.7	0.0	4.7	0.0
	畠雑草群落	1.9	0.0	1.9	0.0
	水田雑草群落	37.9	0.0	37.9	0.0
	市街地	7.7	0.1	7.6	1.2
	開放水域	4.1	0.0	4.1	0.0
	自然裸地	0.0	0.0	0.0	0.0
小 計		699.8	5.2	694.6	0.7
平地の耕作地 及び市街地	シイ・カシ二次林	0.6	0.0	0.6	0.0
	コナラ群落	2.7	0.0	2.7	0.0
	アカメガシワーカラスザンショウ群落	6.0	0.0	6.0	0.0
	ネザーススキ群集	0.8	0.0	0.8	0.0
	ツルヨシ群集	2.4	0.0	2.4	0.0
	スギ・ヒノキ・サワラ植林	0.0	0.0	0.0	0.0
	竹林	10.4	0.0	10.4	0.0
	ゴルフ場	12.5	0.0	12.5	0.0
	路傍・空地雑草群落	4.8	0.0	4.8	0.0
	果樹園	0.1	0.0	0.1	0.0
	畠雑草群落	0.1	0.0	0.1	0.0
	水田雑草群落	55.6	0.0	55.6	0.0
	放棄水田雑草群落	0.1	0.1	0.0	100.0
	市街地	48.6	-5.3	53.9	-10.8
	造成地	2.7	0.0	2.7	0.0
	開放水域	3.8	0.0	3.8	0.0
	自然裸地	0.8	0.0	0.8	0.0
小 計		152.1	-5.2	157.3	-3.4
合 計		851.9	0.0	851.9	0.0

注 1) 表中の面積及び割合は、四捨五入しているため合計が合わない場合がある。

注 2) マイナスの値は、改変による増加する環境要素である。

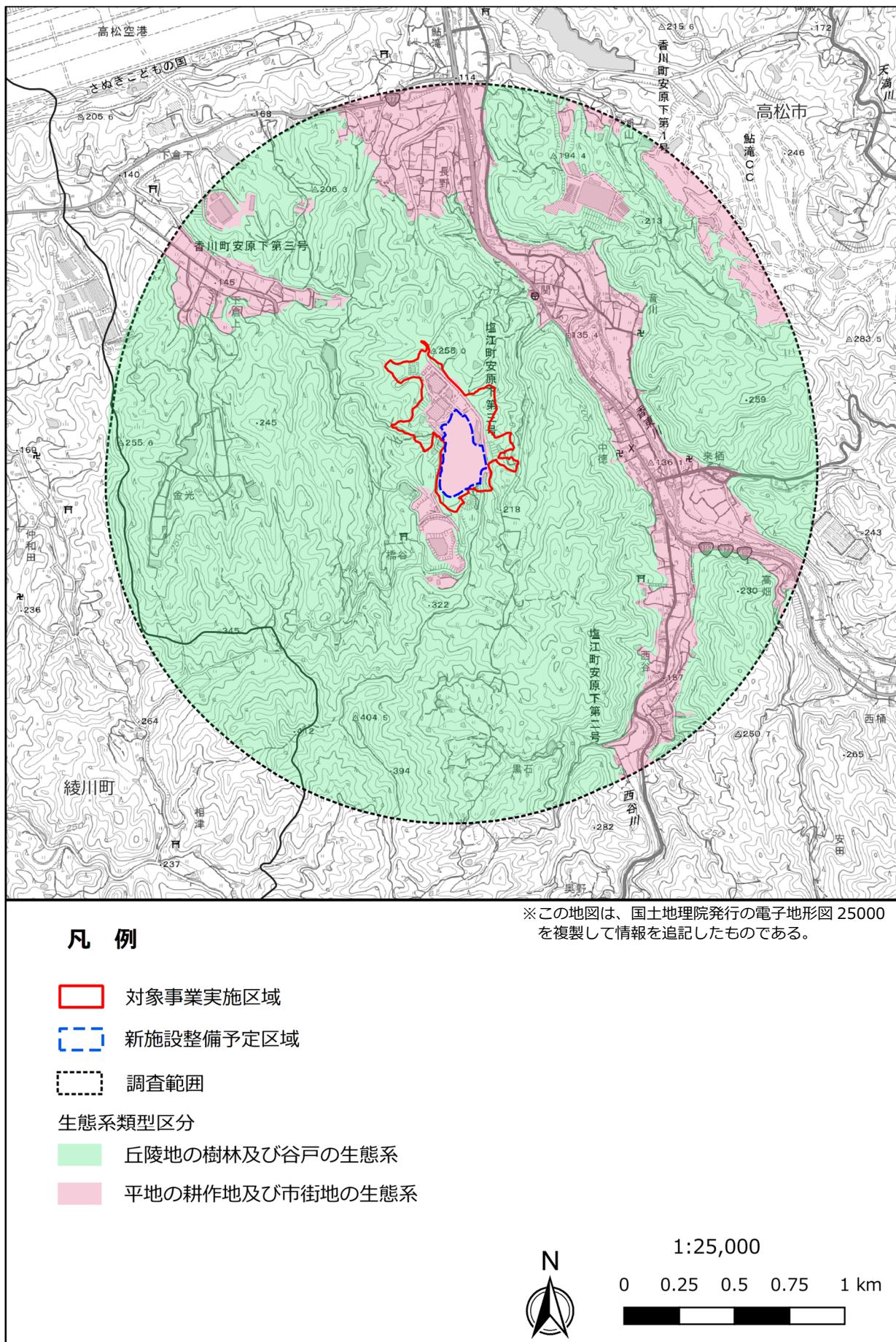


図 6.8.2-1 環境類型区分の予測結果

ii) 生態系の注目種（上位性、典型性）

注目種に対する造成等の施工による一時的な影響の予測結果を表 6.8.2-6～表 6.8.2-7に示す。

生息地の消失又は縮小における予測結果は、予測対象種14種全てが「影響は極めて小さい（C）」に該当した。

土地の改変に伴う水の濁りに係る予測結果は、予測対象種 6 種のうち「影響を受ける（A）」及び「影響は小さい（B）」に該当する種はなく、「影響は極めて小さい（C）」に該当する種は 5 種、「影響はない（D）」に該当する種は 1 種であった。

表 6.8.2-6 注目種ごとの予測結果（上位性）

No.	種名	予測結果		結果区分
1	哺乳類 キツネ	生息状況・ 生息環境	<ul style="list-style-type: none"> ・山地から草原に生息する中型の哺乳類である。 ・夜行性で主に小型哺乳類、鳥類、昆虫類等を捕食するが、餌が少ない場合は果実を食べることもある。 ・現地調査では糞の確認とトレイルカメラで撮影された。 	/
		生息地の 消失又は 縮小	<p>新施設整備予定区域及び周辺地域の樹林等は、本種の生息環境として利用されている。本種の生息環境は、その一部が改変されるものの、同様の環境が広く残存する。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。</p>	C
2	鳥類 オオタカ	生息状況・ 生息環境	<ul style="list-style-type: none"> ・山地や平地の樹林地に生息する。中～大型の肉食鳥類で、年中生息地に留まる留鳥である。 ・主に鳥類を捕食するほか、小型哺乳類やヘビ類を捕食することがあり、食物連鎖の上位種と位置づけられる。 ・現地調査では新施設整備予定区域から約 2 km離れた樹林地で営巣が確認され、新施設整備予定区域周辺にも飛来している。 	/
		生息地の 消失又は 縮小	<p>新施設整備予定区域及び周辺地域の樹林等は、本種の餌場環境として利用されており、約 2 km離れた地点に営巣地が確認された。本種の生息環境は、その一部が改変されるものの、同様の環境が広く残存する。また、確認された営巣地は十分に離れている。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。</p>	C

注) 結果区分は、影響の程度により「影響を受ける（A）」、「影響は小さい（B）」「影響は極めて小さい（C）」、「影響はない（D）」の4段階に区分した。

表 6.8.2-7(1) 注目種ごとの予測結果（典型性）

No.	種名	予測結果		結果区分
1	哺乳類 イノシシ	生息状況・ 生息環境	<ul style="list-style-type: none"> 里山を中心に生息する大型哺乳類である。 植物の根茎や果実、タケノコなどの植物質から両生類、爬虫類、昆虫類などの動物質まで食べる雑食性である。 現地調査では多数の足跡やぬた場が確認された。 	
		生息地の 消失又は 縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の樹林等は、本種の生息環境として利用されている。本種の生息環境は、その一部が改変されるものの、同様の環境が広く残存する。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
2	鳥類 キビタキ	生息状況・ 生息環境	<ul style="list-style-type: none"> 山地の広葉樹林に生息する小型の鳥類である。 夏鳥で、主に樹林の樹冠付近でハエやガなどの小型の昆虫類を捕食する。 現地調査では繁殖期に広く囀りが確認されており、繁殖している可能性はある。 	
		生息地の 消失又は 縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の樹林等は、本種の生息環境として利用されている。本種の生息環境は、その一部が改変されるものの、同様の環境が広く残存する。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
3	鳥類 ハクセキレイ	生息状況・ 生息環境	<ul style="list-style-type: none"> 水辺や周辺の農耕地や市街地に生息する小型の鳥類である。 主に水辺や草地などの地面付近でカゲロウやハエなどの小型の昆虫類を捕食する。 現地調査では冬季を除き確認され、人工構造物で繁殖が確認された。 	
		生息地の 消失又は 縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の樹林や草地等は、本種の餌場環境として利用されており、新施設整備予定区域に隣接する現有施設（高松市南部クリーンセンター）の建物では、本種の繁殖行動が確認された。本種の生息環境は、その一部が改変されるものの、同様の環境が広く残存する。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
		土地の改 変に伴う 水の濁り	本種の生息環境（餌の水生昆虫の生息場所）の一部である新施設整備予定区域下流側の沢や池は新施設整備予定区域からの排水の流入経路となっている。しかし、「6.5.水質」で検討した環境保全措置の実施により、新施設整備予定区域下流側の降雨時の浮遊物質量は現況調査結果の変動範囲内もしくはそれ以下の濃度になると予測される。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C

注) 結果区分は、影響の程度により「影響を受ける（A）」、「影響は小さい（B）」「影響は極めて小さい（C）」、「影響はない（D）」の4段階に区分した。

表 6.8.2-7(2) 注目種ごとの予測結果（典型性）

No.	種名	予測結果		結果区分
4	爬虫類 クサガメ	生息状況・ 生息環境	・河川や池、沼等に生息する。体長 20cm 程度のカメ類。 ・雑食性で、水生昆虫、貝類、植物などを食べる。 ・現地調査では、年中を通して 1か所のやや開けた池で確認された。	
		生息地の 消失又は 縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の池等は、本種の生息環境として利用されているが、生息が確認された 1か所の池は改変されない。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
		土地の改 変に伴う 水の濁り	本種の生息環境の一部である新施設整備予定区域下流側の沢や池は新施設整備予定区域からの排水の流入経路となっている。しかし、「6.5.水質」で検討した環境保全措置の実施により、新施設整備予定区域下流側の降雨時の浮遊物質量は現況調査結果の変動範囲内もしくはそれ以下の濃度になると予測される。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
5	爬虫類 ニホンカ ナヘビ	生息状況・ 生息環境	・平野部から山地の草地などに生息する小型の爬虫類。 ・日当たりのよい林道や草原の地面を徘徊し、小型昆虫類やクモ類、陸上甲殻類などを捕食する。 ・現地調査では、日当たりのよい林道や草原で初夏季を除き幼体や成体が確認された。	
		生息地の 消失又は 縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の樹林や草地等は、本種の生息環境として利用されている。本種の生息環境は、その一部が改変されるものの、同様の環境が広く残存する。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
5	両生類 シュレー ゲルアオ ガエル	生息状況・ 生息環境	・水田や湿地に近い樹林に生息する。体長 4cm 程度のカエル類。 ・成体は樹上で昆虫類やクモ類を捕食し、幼生は繁殖環境の湿地などで水生昆虫や藻類を捕食する。 ・現地調査では、年中を通して確認され、繁殖期には池周辺で成体の鳴き声が確認され、湿地では幼生も確認された。	
		生息地の 消失又は 縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の池や樹林等は、本種の生息環境として利用されている。この様な環境は、比較的普遍的な環境であると考えられる。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
		土地の改 変に伴う 水の濁り	改変により消失する池以外には、繁殖可能な池等への新施設整備予定区域からの排水の流入経路はない。そのため、本種の生息環境への影響はない。	D

注) 結果区分は、影響の程度により「影響を受ける (A) 」、「影響は小さい (B) 」「影響は極めて小さい (C) 」、「影響はない (D) 」の4段階に区分した。

表 6.8.2-7 (3) 注目種ごとの予測結果（典型性）

No.	種名	予測結果		結果区分
6	昆虫類 マツモムシ	生息状況・ 生息環境	<ul style="list-style-type: none"> 平地や丘陵地の水田やため池などに生息する体長 1cm 程度の水生昆虫。 水中で、小型の魚類やオタマジャクシ、水に落ちた昆虫類などに口吻を突き刺し体外消化で体液を吸う。 調査対象の全ての池で成虫が多く確認された。 	
		生息地の消失又は縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の池等は、本種の生息環境として利用されている。底生動物の調査対象の全ての池で確認されるなど、香川県内では普遍的に生息していると考えられる。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
		土地の改変に伴う水の濁り	本種の生息環境の一部である新施設整備予定区域下流側の沢や池は新施設整備予定区域からの排水の流入経路となっている。しかし、「6.5.水質」で検討した環境保全措置の実施により、新施設整備予定区域下流側の降雨時の浮遊物質量は現況調査結果の変動範囲内もしくはそれ以下の濃度になると予測される。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
7	昆虫類 ヤママユ	生息状況・ 生息環境	<ul style="list-style-type: none"> 主に広葉樹林に生息する。開張 10cm 程度のヤママユガ科。 幼虫の食草は主にブナ科であるが、カバノキ科やバラ科など幅広い植物を食べる。成虫は口が退化しているため何も食べない。 現地調査ではコナラに寄生する幼虫や樹木に止まる成虫が確認された。 	
		生息地の消失又は縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の樹林等は、本種の生息環境として利用されている。本種の生息環境は、その一部が改変されるものの、同様の環境が広く残存する。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
8	陸産貝類 セトウチマイマイ	生息状況・ 生息環境	<ul style="list-style-type: none"> 殻径 3cm 程度の多湿環境を好む樹上性のカタツムリ。 落ち葉やキノコ類を好んで食べる。殻の成長に必要なカルシウムを補給するため、コンクリートに発生する藻類も食べる。 現地調査では、秋季・夏季ともに、林縁や林内など広い範囲で多数が確認された。 	
		生息地の消失又は縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の樹林や草地等は、本種の生息環境として利用されている。本種の生息環境は、その一部が改変されるものの、同様の環境が広く残存する。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
9	魚類 カワヨシノボリ	生息状況・ 生息環境	<ul style="list-style-type: none"> 河川の中～上流に生息する底生の魚類である。 吸盤状の腹鰓で石などに貼りついて移動する。川底の藻類や底生昆虫を食べる。 現地調査では下流の沢の 2か所で幼魚及び成魚が確認された。 	
		生息地の消失又は縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の沢は、本種の生息環境として利用されているが、繁殖環境の沢は改変されない。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
		土地の改変に伴う水の濁り	本種の生息環境の一部である新施設整備予定区域下流側の沢は新施設整備予定区域からの排水の流入経路となっている。しかし、「6.5.水質」で検討した環境保全措置の実施により、新施設整備予定区域下流側の降雨時の浮遊物質量は現況調査結果の変動範囲内もしくはそれ以下の濃度になると予測される。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C

注) 結果区分は、影響の程度により「影響を受ける (A) 」、「影響は小さい (B) 」「影響は極めて小さい (C) 」、「影響はない (D) 」の4段階に区分した。

表 6.8.2-7 (4) 注目種ごとの予測結果（典型性）

No.	種名	予測結果		結果区分
10	底生動物 スジエビ	生息状況・ 生息環境	・流れの緩やかな川の水草帯や池沼などに生息する。体長5cmエビ類。 ・水生植物や生物の死骸などを食べる雑食性である。 ・現地調査では沢の2か所と池の1か所で確認された。	
		生息地の 消失又は 縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の沢や池等は、本種の生息環境として利用されているが、繁殖環境の沢や池は改変されない。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
		土地の改 変に伴う 水の濁り	本種の生息環境の一部である新施設整備予定区域下流側の沢や池は新施設整備予定区域からの排水の流入経路となっている。しかし、「6.5.水質」で検討した環境保全措置の実施により、新施設整備予定区域下流側の降雨時の浮遊物質量は現況調査結果の変動範囲内もしくはそれ以下の濃度になると予測される。よって、本種の生息環境への影響は極めて小さい。	C
11	植物 コナラ	生育状況・ 生育環境	・日当たりのよい低地から山地にかけて分布する落葉高木。 ・二次林の代表種で、葉や堅果（ドングリ）などが、多くの昆虫類や鳥類などの餌となるほか、これらの生息場所を提供する。 ・調査地域ではコナラ群落の割合が最も広く、約45%を占めている。	
		生育地の 消失又は 縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域の樹林地には本種の生育地が広大に広がっており、コナラを主体とした植生は調査範囲全体の45%を占めている。生育範囲の一部が改変されるものの、同様の環境が広く残存する。よって、本種の生育環境への影響は極めて小さい。	C
12	植物 ヤブラン	生育状況・ 生育環境	・谷筋の林床の日陰から半日陰に生育する常緑多年生植物。 ・実や葉が多くの昆虫類や鳥類などの餌となる。 ・谷筋の放棄耕作地（植生はコナラ群落）の林床や池の堤などに多く生育していた。	
		生育地の 消失又は 縮小	新施設整備予定区域及び周辺地域には、本種の生育環境となり得る谷戸の耕作放棄地が点在している。この様な環境は、比較的普遍的な環境であると考えられる。よって、本種の生育環境への影響は極めて小さい。	C

注) 結果区分は、影響の程度により「影響を受ける（A）」、「影響は小さい（B）」「影響は極めて小さい（C）」、「影響はない（D）」の4段階に区分した。

2) 環境保全措置

① 環境保全措置の検討

重要な種（個体群）のうち、予測の結果、「影響を受ける（A）」又は「影響は小さい（B）」に該当した種は無かったが、更なる生態系保全の観点から、環境保全措置の検討を行った。検討内容を表 6.8.2-8 に示す。

表 6.8.2-8 環境保全措置の検討内容（生態系）

環境影響要因	環境保全措置の種類	環境保全措置の内容
生息地の消失又は縮小	地形改変の最小化	工事施工ヤードは新施設整備予定区域内を利用するなど、土地の不要な改変を避けることで、動物の生息環境、植物の生育環境の消失・縮小を最小化する。
	植栽の実施	敷地内において、可能な限り植栽を施すことで、動物の生息環境を創出する。
	建設機械・工法の選定	できる限り低騒音型の建設機械・工法を採用するよう努める。
	施工時の配慮	工事関係者に対し、工事区域外への不要な立ち入りや動物・植物の採取等を禁止する。
土地の改変に伴う水の濁り	仮設沈砂池の設置	敷地内の雨水を仮設沈砂池に集めて沈砂後に下流河川へ放流する。
	仮設沈砂池の浚渫	仮設沈砂池における濁水の沈降機能が維持されるよう、定期的な土砂の抜き取りなど適切な対応に努める。
	速やかな転圧等	造成の終わった法面等は、速やかな転圧又は養生シートでの地表面の被覆等を行う。

② 環境保全措置の検討結果

環境保全措置の検討及び検証を行った結果、実施することとした環境保全措置の内容を表 6.8.2-9に示す。

表 6.8.2-9 環境保全措置の検討結果（生態系）

環境影響要因	措置の種類	措置の区分	実施主体	保全措置の内容及び効果	効果の不確実性	新たに生じる影響
生息地の消失又は縮小	地形改変の最小化	最小化	高松市	工事施工ヤードは新施設整備予定区域内を利用するなど、土地の不要な改変を避けることで、動物の生息環境、植物の生育環境の消失・縮小を最小化し、生態系への影響を低減できる。	なし	なし
	植栽の実施	低減	高松市	敷地内において、可能な限り植栽を施すことで、動物の生息環境を創出することができる。	なし	なし
	建設機械・工法の選定	低減	高松市	できる限り低騒音型の建設機械・工法を採用するよう努めることで、生態系への影響を低減できる。	なし	なし
	施工時の配慮	低減	高松市	工事関係者に対し、工事区域外への不要な立ち入りや動物・植物の採取等を禁止することで、生態系への影響を低減できる。	なし	なし
土地の改変に伴う水の濁り	仮設沈砂池の設置	低減	高松市	敷地内の雨水を仮設沈砂池に集めて沈砂後に下流河川へ放流することにより、下流河川等への濁水の影響を低減できる。	なし	なし
	仮設沈砂池の浚渫	低減	高松市	仮設沈砂池における濁水の沈降機能が維持されるよう、定期的な土砂の抜き取りなど適切な対応に努めることにより、下流の河川等への濁水の影響を低減できる。	なし	なし
	速やかな転圧等	低減	高松市	造成の終わった法面等は、速やかな転圧又は養生シートでの地表面の被覆等を行うことにより、下流の河川等への濁水の影響を低減できる。	なし	なし

3) 事後調査

予測の結果「影響を受ける（A）」に該当する種はなかった。このため、事後調査は実施しない。

4) 評価

① 評価の手法

土地の改変及び施設の存在に伴う生態系への影響の評価は、対象項目に係る環境影響が、事業者により実行可能な範囲内で回避又は低減されているかどうかを評価する方法により行った。

② 評価結果

調査及び予測の結果、並びに前項に示す環境保全措置の検討結果を踏まえると、造成等の施工による一時的な影響及び施設の存在に伴う生態系への影響は、前項の環境保全措置を講じることにより、回復又は低減が期待できるものと考えられる。

以上のことから、造成等の施工による一時的な影響及び施設の存在に伴う生態系への影響については、事業者の実行可能な範囲内で回避又は低減が図られているものと評価した。